

第2章

キャリア教育を通して育成すべき能力についてのこれまでの考え方

キャリア教育を通して育成すべき能力については、国立教育政策研究所生徒指導研究センターによる調査研究報告書『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について』（平成14年11月）が提示した「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）—職業的（進路）発達にかかわる諸能力の育成の視点から—」によって示された能力論が広く知られている。これは「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の4つの能力領域と、それぞれの能力領域において2つの能力（順に「自他の理解能力、コミュニケーション能力」「情報収集・探索能力、職業理解能力」「役割把握・認識能力、計画実行能力」「選択能力、課題解決能力」）を例示したものである。この能力論は、多くの学校関係者の間で「4領域8能力」と呼びならわされており、大多数の学校におけるキャリア教育の基盤として活用されている。

本章では、まず、この「4領域8能力」の開発の経緯や意義について整理する。その後、この能力論の課題について論じ、これが圧倒的多数の学校で活用されていながら、中央教育審議会がなぜ「基礎的・汎用的能力」を提示する必要があったのかを明らかにしていく。

第1節

「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」の提唱とその意義

(1) 文部省委託研究による「4領域12能力」論

平成14年に国立教育政策研究所生徒指導研究センターが提示した「4領域8能力」は、先行する研究の成果を引き継いで開発されたものである。具体的には、平成8年から2年間にわたって当時の文部省の委託を受けて実施された「職業教育及び進路指導に関する基礎的研究」における「進路指導部会」の成果である。

進路指導部会は、本来求められる進路指導を実践に移すために、キャリア発達の促進を目標とした教育プログラムについて、国内外の理論や実践モデル等を分析し、「児童生徒が発達課題を達成していくことで、一人一人がキャリア形成能力を獲得していくこと」が共通した考え方となっていることをみいだした。なかでもキャリア教育の先進国であるアメリカにおいて、学校教育を一貫して段階的に発達させるべき能力についての研究が盛んに行われていたことを受け、アメリカへの実地調査も行っている。その際の問題意識の中心には、従来の日本の進路指導では、多くの場合、生徒の発達に十分な関心が向けられないまま実践すべき課題に焦点が当てられていたため、学年毎の系統性の弱いテーマが設定される傾向にあり、「キャリア発達を促す観点から生徒の能力を育てる」というとらえ方が

十分ではなかったという認識があった。そこで、進路指導部会では「competency-based(育成する能力を基盤とした)を理念として、小学校から高校の12年間に及ぶ進路指導の構造化を提案するにいたった」のである。

進路指導部会は「能力 (competency)」について次のように述べている。

competencyとは、一般には能力と訳されるが、「ある課題への対処能力のことで、訓練によって習熟するもの」という意味を内包している。(中略)この言葉を用いる背景には、「できるかどうか」、「可能性があるかどうか」という個人の現能力を重視する姿勢ではなく、「訓練で習熟させられる」、「一緒に努力すればできるようになる」という「育成」の姿勢がある。(中略)ちなみにcompetentとは「自信をもてる」ことである。児童生徒が「やればできると感じ、自信がもてるようになる」ことがcompetency-basedの効果といえるであろう。(第2部第2章第1節Ⅱ1)

研究会では、アメリカの代表的な能力モデルやデンマークのモデル等を研究する過程で、それらをそのまま模倣することは意味がないと結論付けた。研究委員である小学校、中学校、高等学校、大学の教師と企業の代表者らが、海外のモデルを参考にしながら、「将来、自分の職業観・勤労観を形成・確立して、自立的に社会の中で生きているために、今から育てなければならない能力、態度とは何か」について議論し、日本の学校で児童生徒のためにできることを検討して、その結果、4領域12能力を試作した(表2-1)。

その上で、各学校段階で従来から取り組んできた様々な活動に注目し、特に小学校では社会性の育成、中学校、高等学校では主として在り方生き方の指導や進路指導の具体的な活動をできる限り網羅的に抽出した上で、それらの活動を4領域12能力の枠組みに沿って分類・整理を試みた。この作業は、4領域12能力の枠組みが実際の教育活動をとらえる上で矛盾なく機能することを確認するために行ったものである。(なお、この開発の経緯については、本節末のコラムを合わせて参照していただきたい。)

(2) 「4領域8能力」論の開発と提唱

以上のような経緯で生まれた能力の枠組みは後にさらに検討され、現在広く知られる4領域8能力となった(表2-2)。この開発の経緯について、国立教育政策研究所生徒指導研究センターによる調査研究報告書『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について』(平成14年11月)は次のように述べている。

本調査研究で開発した「職業観・勤労観を育むための学習プログラムの枠組み(例)」は、こうした先行研究(平成8・9年度文部省委託研究「職業教育及び進路指導に関する基礎的研究」〈引用者注〉)の成果を参考にしつつ、直接・間接に職業観・勤労観の形成の支えになると同時に、職業観・勤労観に支えられて発達する能力・態度にはどのようなものがあるかという視点に立って、各学校段階(小学校については低学年、中学年、高学年に細分割)で育成することが期待される能力・態度を改めて検討して

作成したものである。

その際、新たに小・中・高等学校の各段階における職業的（進路）発達課題を検討・整理し、これらの課題達成との関連で上記の具体的な能力・態度を示すことができるように構成するとともに、能力領域については、「人間関係形成能力」、「情報活用能力」、「将来設計能力」、「意思決定能力」の4つの能力領域に大別し、それぞれを構成する能力を再編成して、各2つずつ計8つの能力に整理している。

職業観・勤労観の育成に当たっては、それが一人一人の職業的（進路）発達の全体を通して形成されるという視点に立って、段階的・系統的に取り組むことが大切である。このため、「職業観・勤労観を育むための学習プログラムの枠組み（例）」では、職業的（進路）発達の全体を視野に入れ、職業観・勤労観の形成に関係する能力を幅広く取り上げている。その上で、学校段階ごとの職業的（進路）発達課題との関連を考慮し、各段階ごとに身に付けさせたい能力・態度を一般的な目安として示している。（第4章第2節1）

③ 「4領域8（12）能力」論の意義

このような経緯で開発された「4領域8能力」論は、これまでの進路指導の実践を飛躍的に向上させるだけ論理を示したものとして高く評価できる。先行した「4領域12能力」論を開発した「職業教育及び進路指導に関する基礎的研究」が指摘するように、それまでの進路指導においては、具体的な能力の育成に向けて、発達に即した段階的な指導や支援の在り方についての十分な議論が蓄積されてこなかったからである。

例えば、昭和55年に当時の文部省が公刊した『中学校・高等学校進路指導の手引－個別指導編』では、進路指導の特質を次のように示している。

- 進路指導は、紹介・斡旋であるというように長い間考えられてきた。最近では、学校が行う進路指導は単なる紹介・斡旋の活動ではなく、教育そのものであると考えられるようになってきている。
- 進路指導は、個々の生徒に、自分の将来をどう生きることが自分にとって喜びであるかを感得させなければならないし、生徒各自が納得できる人生の生き方を指導することが大切である。（序章第2節）

この事例では、進路指導は「教育そのもの」であり、「人生の生き方を指導することが大切である」と指摘されるなど、情緒性の高い言説によって進路指導の特徴が述べられている。このような特徴は、昭和50年代を中心に作成された一連の「進路指導の手引き」に共通して見られる。当時の進路指導の概念は、人生全般を視野におさめ、生き方を指導するという大きな方向性において今日のキャリア教育と軌を一にするものの、指導の段階性・系統性の基盤となる構造は有していなかった。一方「4領域12能力」論とそれをベースとした「4領域8能力」論は、「育成すべき具体的な能力」と「能力が身に付いたことによって実践できる行動」を発達の段階に即して具体的に提示するものである。この点において「4領域8（12）能力」論は、従来の進路指導概念を大きく進展させたと言えよう。

表2-2 職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み (例) 一職業的 (進路) 発達にかかわる諸能力の育成の視点から

※ 太字は、「職業観・勤労観の育成」との関連が特に強いものを示す

職業的 (進路) 発達にかかわる諸能力の育成の視点から	小学校		中学校		高等学校		
	低学年	中学年	高学年	学	校	高等学	
職業的 (進路) 発達段階	進路の探索・選択にかかる基礎形成の時期	進路の探索・選択にかかる基礎形成の時期	進路の探索・選択の暫定的選択の時期	進路の探索・選択の暫定的選択の時期	進路の探索・選択の暫定的選択の時期	進路の探索・選択の暫定的選択の時期	
職業的 (進路) 発達課題	自己及び他者への積極的関心の形成、発展 ・身まわりの仕事や環境への関心、意欲の向上 ・夢や希望、憧れ、目標に向かって努力する態度の形成	自己及び他者への積極的関心の形成、発展 ・身まわりの仕事や環境への関心、意欲の向上 ・夢や希望、憧れ、目標に向かって努力する態度の形成	自己理解と自己有用感の獲得 ・興味・関心に基づく職業観・勤労観の形成 ・進路計画の立案と暫定的選択 ・生き方や進路に関する現実的探索	自己理解の深化と自己受容 ・選択基準としての職業観・勤労観の確立 ・進路設計の立案と社会的移行的準備 ・進路の現実的意味と試行的参加	自己理解の深化と自己受容 ・選択基準としての職業観・勤労観の確立 ・進路設計の立案と社会的移行的準備 ・進路の現実的意味と試行的参加	自己理解の深化と自己受容 ・選択基準としての職業観・勤労観の確立 ・進路設計の立案と社会的移行的準備 ・進路の現実的意味と試行的参加	自己理解の深化と自己受容 ・選択基準としての職業観・勤労観の確立 ・進路設計の立案と社会的移行的準備 ・進路の現実的意味と試行的参加
職業的 (進路) 発達にかかわる諸能力	職業的 (進路) 発達にかかわる諸能力	職業的 (進路) 発達にかかわる諸能力	職業的 (進路) 発達にかかわる諸能力	職業的 (進路) 発達にかかわる諸能力	職業的 (進路) 発達にかかわる諸能力	職業的 (進路) 発達にかかわる諸能力	
領域	領域説明	領域説明	領域説明	領域説明	領域説明	領域説明	
人間関係形成能力	【自己理解能力】 自己理解を深め、他者との適切な関係性を築く能力	【自己理解能力】 自己理解を深め、他者との適切な関係性を築く能力	【自己理解能力】 自己理解を深め、他者との適切な関係性を築く能力	【自己理解能力】 自己理解を深め、他者との適切な関係性を築く能力	【自己理解能力】 自己理解を深め、他者との適切な関係性を築く能力	【自己理解能力】 自己理解を深め、他者との適切な関係性を築く能力	
情報活用能力	【情報収集・探索能力】 多様な情報源から必要な情報を収集し、活用する能力	【情報収集・探索能力】 多様な情報源から必要な情報を収集し、活用する能力	【情報収集・探索能力】 多様な情報源から必要な情報を収集し、活用する能力	【情報収集・探索能力】 多様な情報源から必要な情報を収集し、活用する能力	【情報収集・探索能力】 多様な情報源から必要な情報を収集し、活用する能力	【情報収集・探索能力】 多様な情報源から必要な情報を収集し、活用する能力	
将来設計能力	【役割把握・認識能力】 自分の役割や責任を認識し、実践する能力	【役割把握・認識能力】 自分の役割や責任を認識し、実践する能力	【役割把握・認識能力】 自分の役割や責任を認識し、実践する能力	【役割把握・認識能力】 自分の役割や責任を認識し、実践する能力	【役割把握・認識能力】 自分の役割や責任を認識し、実践する能力	【役割把握・認識能力】 自分の役割や責任を認識し、実践する能力	
意思決定能力	【選択能力】 自分の意思に基づき、適切な選択を行う能力	【選択能力】 自分の意思に基づき、適切な選択を行う能力	【選択能力】 自分の意思に基づき、適切な選択を行う能力	【選択能力】 自分の意思に基づき、適切な選択を行う能力	【選択能力】 自分の意思に基づき、適切な選択を行う能力	【選択能力】 自分の意思に基づき、適切な選択を行う能力	

出典：「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」平成14年11月 国立教育政策研究所生徒指導研究センター